

歴史の中の 女たち

第 38 回

イサベル・バレット

(1567 ~ 1612 年)

— 南太平洋の女性提督 —

伊藤 滋子

16, 17 世紀のスペインの歴史は数々の英雄、冒険家の歴史や伝説で満ちているが、その中にただひとり、『提督』の称号を持ち、実際に船団を率いた女性がいた。その名はイサベル・バレット、ポルトガルの航海士でインド領司令官であったフランシスコ・バレットの孫とも、ペルーの征服者でポルトガル出身のヌニョ・ロドリゲス・バレットの娘ともいわれる。(16 世紀末、スペインとポルトガルは一つの国であった。) イサベルは 1567 年頃スペインのガリシア地方の町ポンテベドラで生まれ、貴族の両親に連れられてペルーに渡ったとされるが、両親がペルーに来てから生まれたという説もある。ヌニョ・ロドリゲスは 1574 年地方探検に遠征中に熱病で倒れたが、6 人あるいは 10 人ともいわれる子沢山の一家がその後ペルーのどこでどのように過ごしたのかは判らない。イサベルがロレンソ、ディエゴ、ルイスの 3 人の兄弟と共に姿を現すのは、1585 年のリマであった。だがその前にまず、彼女の夫となるアルバロ・デ・メンダーニャのことを話しておかねばならない。

イサベルが生まれた頃のこと、リマのアウディエンシア（植民地統治機関）の議長に任命されたロペ・ガルシア・デ・カストロについてペルーに渡ってきたひとりの若者がいた。議長の甥のアルバロ・デ・メンダーニャでこの時 25 歳、ペルーはまだ黄金熱に沸いていた。彼は遠縁の男からアメリカ大陸の遥か西北に黄金郷があるらしいという話を聞きこんで、伯父に探検の許可を求めた。ちょうど副王の交代でロペ・ガルシア

が短期間、副王代理を務めていた時のことで、彼は甥の願いを許したが、どうやらそれは越権行為だったらしい。メンダーニャは 1567 年 11 月、隊員 150 人、修道士 4 人、黒人奴隷 20 人を乗せた 2 隻の船を率いてカリャオから南太平洋へ向けて出航した。

一行は翌 2 月 7 日最初の島を見つけ、そこをサンタ・イサベルと名付けた。幸いにも首長の一人と友好を結ぶことに成功し、さらにガダルカナル島、サン・クリストバル島など数多くの島々を『発見』し、住民がわずかな金の装飾品を身につけているのを見て、そこが遠縁の男から聞いた伝説の地と信じて、ソロモンの黄金の神殿に因んでソロモン諸島と名付けた。しかしまだ若く経験もないメンダーニャが野心に満ちた海の男の集団を統率することは不可能に近く、部下との対立、悪天候などに翻弄され、また隊員が先住民に悪事を働いたことから戦闘が続き、半年後には引き上げざるを得なくなった。隊はほとんど何の収穫もないまま、カリフォルニア沿岸などを漂流しながらようやくメキシコのコリマに到着し、出航して 22 カ月後にカリャオに帰りついた。32 人の隊員を失い、ほとんど全員が負傷しながらも帰還できただけで幸いというものだったが、この航海に 1 万ドゥカドを投資したメンダーニャはすべてを失った。

リマには第 5 代副王トレドが到着していて、メンダーニャは再度ソロモン諸島の探検に挑戦したいと願い出るが、彼の伯父のロペ・ガルシアと対立していた副

王はにべもなくその要請を拒絶した。彼は王に手紙を送るが、当時本国政府はオランダの離反やインディアスの諸問題に忙殺されており、何の回答も得られないまま年月が過ぎた。そこで彼はスペインに渡り、フェリペ2世に拝謁してソロモン諸島がいかにか将来性のある土地か、キリスト教徒とすべき先住民人口がいかにか多いかを訴え、王から直々に探検の許可を授かることに成功した。彼はスペインに3年間滞在して探検の参加者を募ったり準備に奔走したあと、リマに戻って第7代副王トーレスに、王令に基づきソロモン諸島への航海の資金援助を求めた。ところが当時リマは大地震の直後で、探検に出資できるような状況ではなかった。

メンダーニャがイサベルと出会ったのはこの頃のことである。黒髪その女性は誇り高く勝気な強い性格の持ち主で、しかも野心家、未知の土地を切り開くための資質あり、と彼が見込んだものか。しかし何よりも魅力的だったのは彼女には多額の持参金があったことだ。「もしも航海が成功すれば、君はソロモン諸島の司令官夫人となり、侯爵夫人の称号も夢ではない」と囁かれれば、両親から冒険者の精神を受け継ぎ、まだ20歳にもならないイサベルの血が騒いだのも無理はない。確かにフェリペ2世の命令書には、「貴公がこの探検を成功させた暁には、子孫代々までを王の臣下とし、爵位を授ける」と約束されていた。二人は1586年リマで結婚し、イサベルはリマの副王宮廷でアデランタード（探検隊の総指揮者）と呼ばれていた夫の最強の支援者となった。だが彼らの夢が叶うにはさらに10年の歳月を要し、結局実現に漕ぎつけたのは第8代副王メンドサの後押しによるものだった。そして最後にそれを可能にしたのは、やはりイサベルの持参金だった。

イサベルとメンダーニャが乗った船は1595年4月カリャオを出港してペルー沿岸を北上し、トルヒーヨ、サニャで他の船と合流したが、最初から問題が続出し、この航海の将来の困難さを思わせた。ことにポルトガル人航海長ペドロ・フェルナンデス・キロスと兵士の隊長、ペドロ・マリノは何かにつけて衝突するのだが、この隊長はだれとでも諍いを起こすことからみても問題の人物で、船団は最初から大変な火種を抱え込んだようである。フェリペ2世は副王メンドサに宛てて「ペルーを浄化する最良の方法は反乱者や厄介者をメンダーニャの探検隊に送りこんでしまうことだ」と書いたと言われていることを見ても、募集に応じて集まったのがいかなる類の人々だったかが想像できよう。

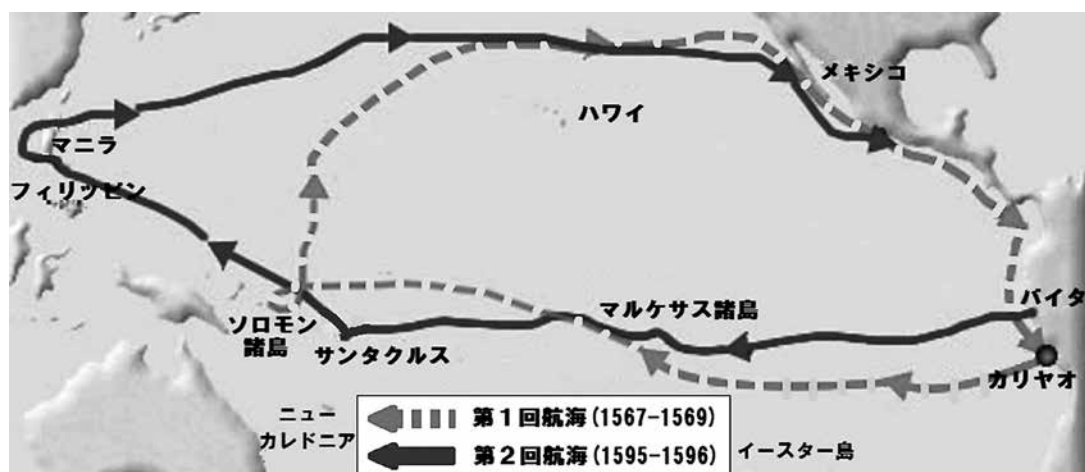
ともかくも4隻からなる船団は1595年6月15日、最後の寄港地パイタを離れ、太平洋を西北に向かった。総勢378人、うち成人男子は280人で、その中にはイサベルの3人の兄弟、ロレンソ、ディエゴ、ルイス、イサベルの妹マリアナの夫で航海士のロペ・デ・ベガ、僧3人、修道士1人、黒人奴隷などがおり、その他にイサベルとマリアナ、その従者など、98人の女性や子供がいた。中には妻と5人の子供を連れた植民者もあった。船には食糧や薪、水瓶1800個のほかに植民に必要な道具、家畜、種なども積み込まれた。

35日間の航海のあと最初の島が見つかり、翌日島の南側に回ると3〜10人乗りの70隻ものカヌーが現れた。先住民たちは肌も歯も白く、立派な体格で手足や指も長く、目つきも悪くない。全裸で顔や体に青い刺青をし、好奇心からカヌーで船の後をついてきたが、友好的だった。続いて3つの島が現れ、メンドサ副王カニエテ侯爵の夫人を記念してマルケサス（侯爵夫人）諸島と命名してそれを領有する儀式を執り行った。しかし、メンダーニャはソロモン諸島のサンタ・イサベル島を目指していたので、船を修理し、水や薪、食糧を積みこむと出発命令を下した。一刻も早く落ち着き、植民に取りかかりたいと考えていた家族連れのものからは不満の声が上がるが、メンダーニャはあと少しだからと彼らをなだめて出航したものの、なかなか島影が現れず、水が不足し始めると再び不満が噴出し、目的地を通り過ぎてしまったのではないかと疑う者が出てきた。

ようやく9月7日、島に着くが目指すサンタ・イサベル島ではなく、サンタ・クルス島と命名した。しか



アルバロ・デ・メンダーニャ



メンダーニャの2度の航海

もイサベルの妹マリアナの夫ロペ・デ・ベガが指揮する182人が乗った船が行方不明となり、マリアナは嘆き悲しむ。島から50隻のカヌーがきて、乗っている男たちは色が黒く、縮れた髪を色とりどりに染めて歯も赤く塗っており、簡単な衣服や装飾品を身につけていた。メンダーニャはここでマロペという首長と友好を結ぶことができ、食糧などを供給してもらえた。隊はしばらくここに留まり、行方不明になった僚船を探したり、周囲の島を探索したりするが、さまざまな問題が持ち上がってきた。イサベルの兄ロレンソと軍隊長マリノが対立、そこにイサベルが加わり火に油を注ぐ。狭い集団の中での男女のもつれ、食糧不足、病気の蔓延、他部族の攻撃などで、とうとうペルーに帰りたというグループが署名集めを始める始末である。メンダーニャに強力な統率力が欠けていたことも混乱の一因で、それを補おうとするイサベルの強い言動ばかりが目立ち、事態は余計に混迷を深めた。

そしてとうとう優柔不断なメンダーニャも命令に従わない隊長マリノとその腹心を反逆者として誅殺するのだが、その直後のこと、隊員のひとりが先住民からもっと多くの食料をせしめようと、首長たちのなかでただ一人協力的だったマロペを殺してしまった。先住民を宥めるためにメンダーニャはこの隊員まで殺さねばならない羽目に陥ったのだが、この時すでに彼自身がマラリアに罹っており、10月18日病没する。享年53歳だった。彼の遺書には、多くの人の予想に反して、イサベルを司令官として地上での統率権を、彼女の兄ロレンソを提督として海上での統率権を委ねると記されてあったが、数日後、その兄までもが先住民の毒矢に倒れ、彼の遺言により、イサベルは提督をも兼ねることとなる。スペイン史上初の女性提督となった

彼女は苦境に陥った船団を一人で率いなければならなくなかった。

彼女が最初に下した決断はサンタ・クルスを放棄することだった。島に村を築き始めていた家族持ちの植民者からは不満の声が上がるが、頼みの綱であったマロペを殺してしまったあと、先住民との共存はもう不可能だった。主だった者を集めて会議が開かれ、フィリピンに向かうか、あるいはサンタ・イサベル島探しを続行するかが検討された。中にはペルーへ帰りたというものもいたが、それは不可能で、結局900レグア(5000km)先にあるフィリピンに向かうことに決まった。しかし船の傷みは激しく、浅瀬の多い危険な海域である。しかも航海長のキロスも常々、イサベルが陰で夫を操り、何事にも口出しすることに嫌悪感を抱いていたので、二人の仲はすこぶる険悪であった。

3隻の船は1595年11月18日サンタ・クルス島を後にした。12月11日赤道付近で1隻の船が脱走して船団から離れて行った。後にその指揮官はマニラで反逆罪で裁かれることになる。さらにそれから8日後の夜、もう1隻の船が救援を求めてきたが、イサベルは暗闇の中で近づくのは危険だとしてそれに応じず、夜が明けると船は見えなくなっていた。イサベルの船も食糧は底をつき、水は腐り、帆も操具もほとんど失い、男たちは死者がでてでも死体を海に投げる力もないほど衰弱していた。島に近づくと先住民から椰子の実や果物を分けてもらうことができたが、小舟を失ったので上陸できず、先を急ぐ。恐らく探していたサンタ・イサベル島の近くを通ったはずだが、それを確認する気力も失せていた。

このみじめな航海の間もイサベルと航海長キロスの間には諍いが絶えない。彼は飢え死にするよりも今こ

こで食糧を配ることを要求するが、イサベルは購入費4万ペソを出したのは自分だからと拒否する。すると彼は、航海術を知らないメンダーニャに代って自分が働いたのに、その代償を受け取っていないと主張し、とうとうイサベルが折れて、子牛を一頭提供したので、人々はようやく飢えをしのぐことができた。島の沖合に停泊すると先住民が米などを売りにきて、キロス自分の金で2袋買い、皆に分け与えたが、イサベルは値段が余りにも高いので、買わなかったと、キロスはイサベルがいかに冷酷で、吝嗇で、利己的であったかを書き募る。さらに、船がマニラに近づいた時、救援の船がきて、乗り込んできた役人はまだ豚その他の食糧や水が残っているのに皆が飢えているのを見て驚いた。イサベルは夫のミサをあげるために取っておいたと弁明するが、役人はそれに耳を貸さず、豚を殺して皆に分け与えるように命じた。サンタ・クルスを出て50人が命を落としたが、残っていた20甕の水、小麦などの食糧を配っていれば死者の数はもっと少なかったかもしれないとキロスは述べている。記録はキロスの航海日誌しか残っていないので、われわれはそれに頼るしかない。

しかしイサベルが自分の権利と義務をはっきりと認識し、責任を受け止め、確信をもって決断を下したからこそ、困難な航海を乗り切ることができたことも確かであった。彼女はメンダーニャの志を自分のものとし、財産も青春も安楽な生活も犠牲にしてこの航海に賭けていた。百戦錬磨の海の荒くれ男たちを相手にして彼らの上に立つ唯一の方法はエゴイストや冷酷さという鎧を纏うしかなかったのであろう。

船は2月12日マニラに到着した。人々はソロモン諸島から来たイサベルを『シバの女王』と呼び、長い間その名は彼らの記憶に残った。だが彼女はまだ30歳前、人生がここで終わったわけではない。彼女の前にガリシア出身でサンティアゴ騎士団のフェルナンド・デ・カストロが現れる。船団を率いてフィリピンとアカプルコの間を2度も往復したという海のベテランであった。おそらくイサベルの持つ社会的地位、財力、誇り高い性格が、戦いの中で生きてきた彼のような野心家に驚嘆と欲望を引き起こしたのであろう。一方イサベルは、すでに自分のものでもある亡夫の遺志を遂行するための最良の相手を見つけたと考えたようだ。結婚式は未亡人の喪が明けた1596年11月マニラの教会でとり行われた。

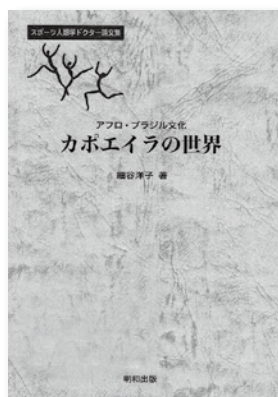
船が修復され、イサベルと新しい夫のカストロ、彼

女の二人の弟、キロスその他ペルーから来た人々を乗せて、1597年8月10日マニラを出航し、3カ月後アカプルコに着いた。中には航海に恐れをなして、マニラに残った者もいた。

イサベルと夫はメキシコからスペイン王に新しい探検の許可を求める手紙を書くが返事はなく、その後生まれた二人の子供を連れて1609年頃スペインへ向かった。しかし許可を得ることができずにペルーへ帰り、カストロは地方の司令官となった。その後イサベルはキロスがフェリペ3世からソロモン諸島探検の許可を得たことを知り、正当な権利は自分にあると抗議の手紙を書くがやはり返事は来ず、カリャオに出向いて8年ぶりにキロスと会って対決する。激しいやりとりが交わされたが、今や新しい王令を手にしたキロスの方が優位にあった。1605年12月21日、イサベルとフェルナンドはほぞを噛みながら、カリャオを出航して行くキロスの3隻の船を見送り、これでイサベルの提督の称号は消え失せ、『シバの女王』は永遠にその領地を失った。

イサベルは1612年、45歳で没したとされているが、生まれた場所同様、それがペルーであったかスペインのガリシアであったかは分からない。そして仇敵のキロスもまた、もう少しのところでオーストラリア発見の栄誉を得るところであったが、探検は失敗に終わる。極貧のなかでなお再度探検に挑戦しようともがく彼の執念には鬼気迫るものがあったが、病に倒れた。海に憑かれた人々の末路はあまりにも悲しいことの方が多いが、海は彼らによって切り開かれてきたのだった。

(いとう しげこ)



『アフロ・ブラジル文化 カポエイラの世界』

細谷 洋子 明和出版

2015 年 4 月 151 頁 2,000 円+税 ISBN-978-4-901933-33-9

ブラジル北東部の港町サルバドール周辺で生まれたといわれるカポエイラは、アフリカから拉致されてきた奴隷たちが武器を持つことを厳に禁じられた中で、護身術の練習や踊りが基となって創造された、身体を使う格闘・舞踏・芸能性を合わせた特異な文化といえるが、近年ではほとんどの大学でカポエイラ関連サークルがあるといわれるほど、日本でも同好者が増えている。

本書はスポーツ科学、舞踏学を専攻する若手研究者が、アクロバット・パフォーマンスにしか見えなかったカポエイラに魅了され、リオデジャネイロで本場の演技を見たことから、文化的固有性をもち、その奥に深い世界観をもったカポエイラを、スポーツ人類学の視点からその歴史・社会的背景を探究した論文である。

2003 年に制定された法令によるアフロ・ブラジル文化と歴史の教育義務化に始まり、08 年のブラジル国内の無形文化遺産登録などの国民統合政策とカポエイラについての教育内容と期待される社会的役割、カポエイラの競技化にともなう競技大会の開催によるシステム化、それとの文化的固有性創造の関係、さらには劇場でのショーに取り上げられるようになったカポエイラのエンターテインメント化の実例も踏まえて、全体として制度からみるカポエイラの社会的役割と文化的固有性を明らかにしようとしている。

〔桜井 敏浩〕



『第三の魔弾』

レオ・ペルッツ 前川道介訳 白水社（白水 U ブックス）

2015 年 7 月 366 頁 1,600 円+税 ISBN978-4-560-07201-1

1519 年にメキシコに侵入したコルテスのスペイン無敵軍より早く、ライン河の暴れん坊伯爵といわれたドイツ人グルムバッハとその部下たちが、宗教改革の嵐で神聖ローマ帝国を追放され、メキシコ湾岸に漂着してアステカ王国の住民に助けられていた。彼とその忠実な部下は、後れて到達したスペイン軍の狙撃兵ノバロから悪魔の助けを受けて賭博で百発百中の銃と三発の弾丸を巻き上げた。大切な銃を失ったノバロはコルテスの命で縛り首にされるが、絶命の寸前に「一発目はお前の異国の王に、二発目は地獄の女に、三発目はお前自身に」との呪いをかけた。

コルテスは客人として招いてくれたアステカのモンテスマ王を捕らえ莫大な財宝を出すよう強要する。スペイン国王への献納分を取り分け、征服者の将校・兵士たちで分配した後、大部分を本国に移送しようとするのだが、カトリックに敵意をもつグルムバッハはそれを阻止するためコルテスを狙撃しようとするが失敗し、モンテスマに銃口を向ける。ノバロの呪いは、その後グルムバッハの愛人の美貌のアステカの娘ダリラ、彼の異母兄弟でコルテスと手を組み、ダリラを手に入れようと誘惑するメンドーサ公爵などの実在・創作上人物が入り乱れ、凄惨な首都ティノティトランの攻防戦などの史実を交えてコルテスのアステカ征服が進む中で、二発目、三発目と実現する。

先祖がユダヤ人迫害を逃れてスペインのトレドからチェコに移住したユダヤ系オーストリア人作家による幻想歴史小説。

〔桜井 敏浩〕